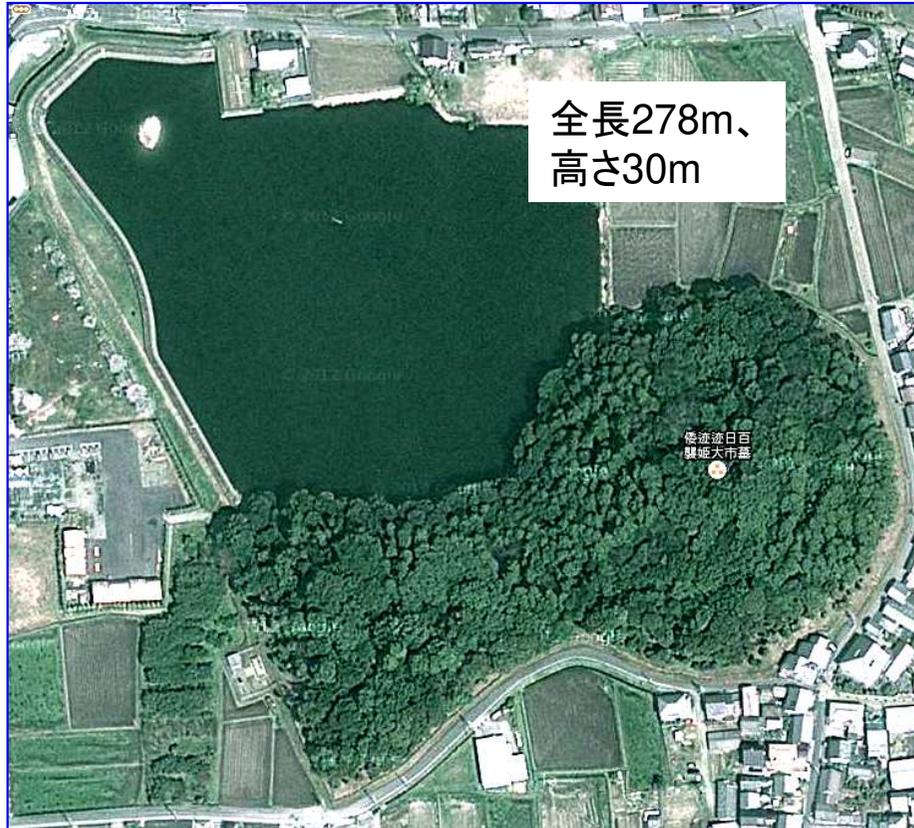


第25回 「箸墓古墳は誰をまつる古墳か？」
大物主神－事代主 説

日時:2023年1月21日(土) オンライン開催
丸地三郎

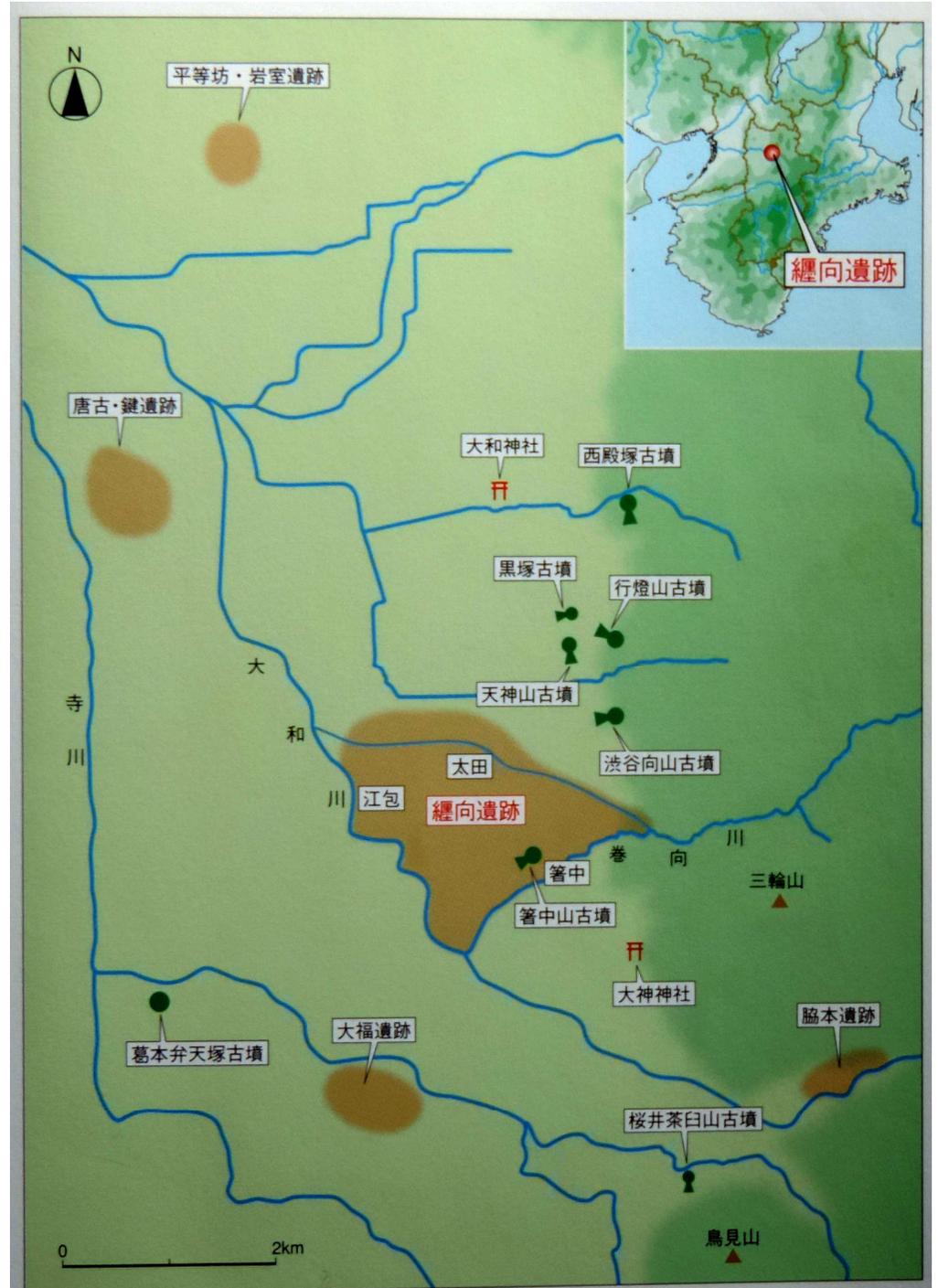
箸墓(箸中山)古墳



- 新泉社 清水眞一著
「最初の巨大古墳 箸墓古墳」
より



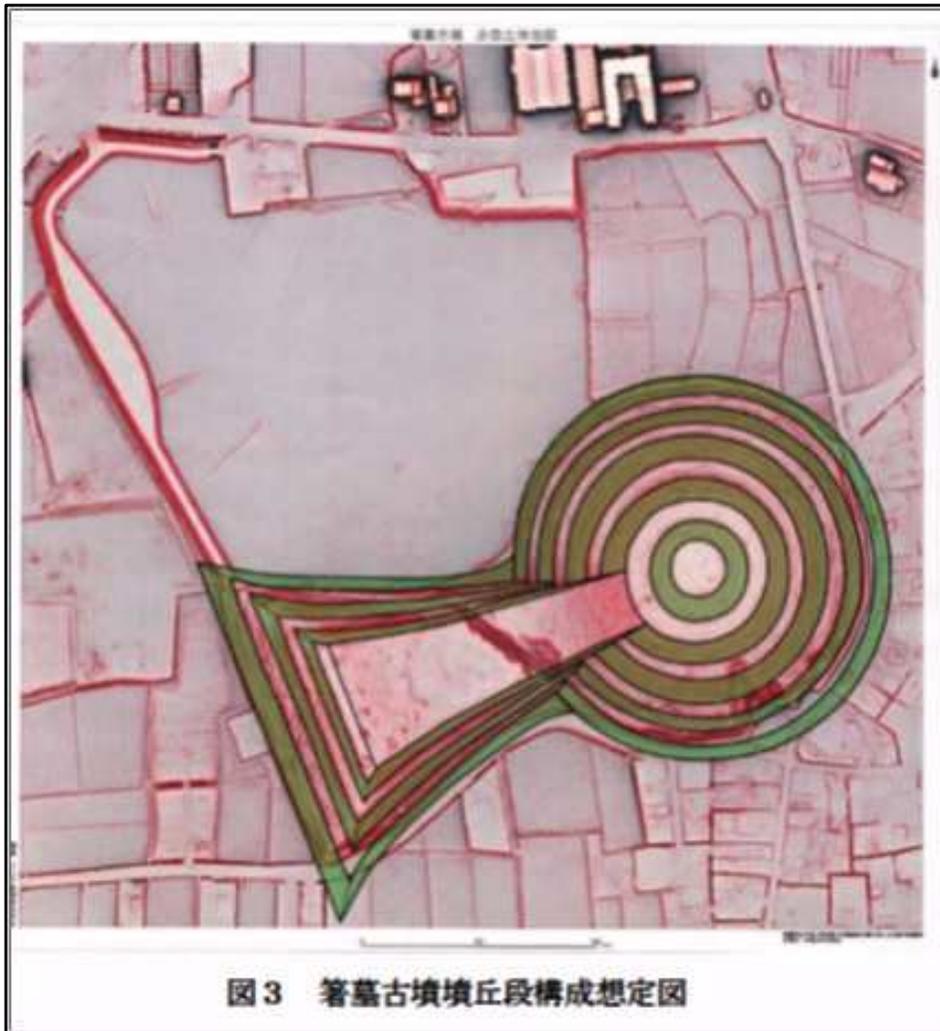
奈良・纏向の箸墓(箸中山)古墳 所在地



・ 新泉社 石野博信著
「邪馬台国の候補地 纏向遺跡」
の図表を借用

箸墓古墳墳丘段構成想定図

- 2012年6月、橿原考古学研究所とアジア航測(株)のプレスリリースより
- 全長約 276m、後円部径約 156m、高約 26m、前方部前面幅約 132m、高約 17m
 - 後円部は 5 段(墳頂の円丘部を含む)、前方部は前面が 4 段
- 航空測量結果をまとめ、墳丘段構成を想定した図が下記左
 - 参考: 同時に測定した西殿塚古墳(全長約 230m)の墳丘段構成を想定した図が右



考古学から学ぶ - 初代巨大前方後円墳のインパクト(衝撃)

長野県の 森將軍塚古墳

全長:100m
前方部巾:30m
前方部高:4m



左の写真は、長野県の森將軍塚古墳(全長100m)

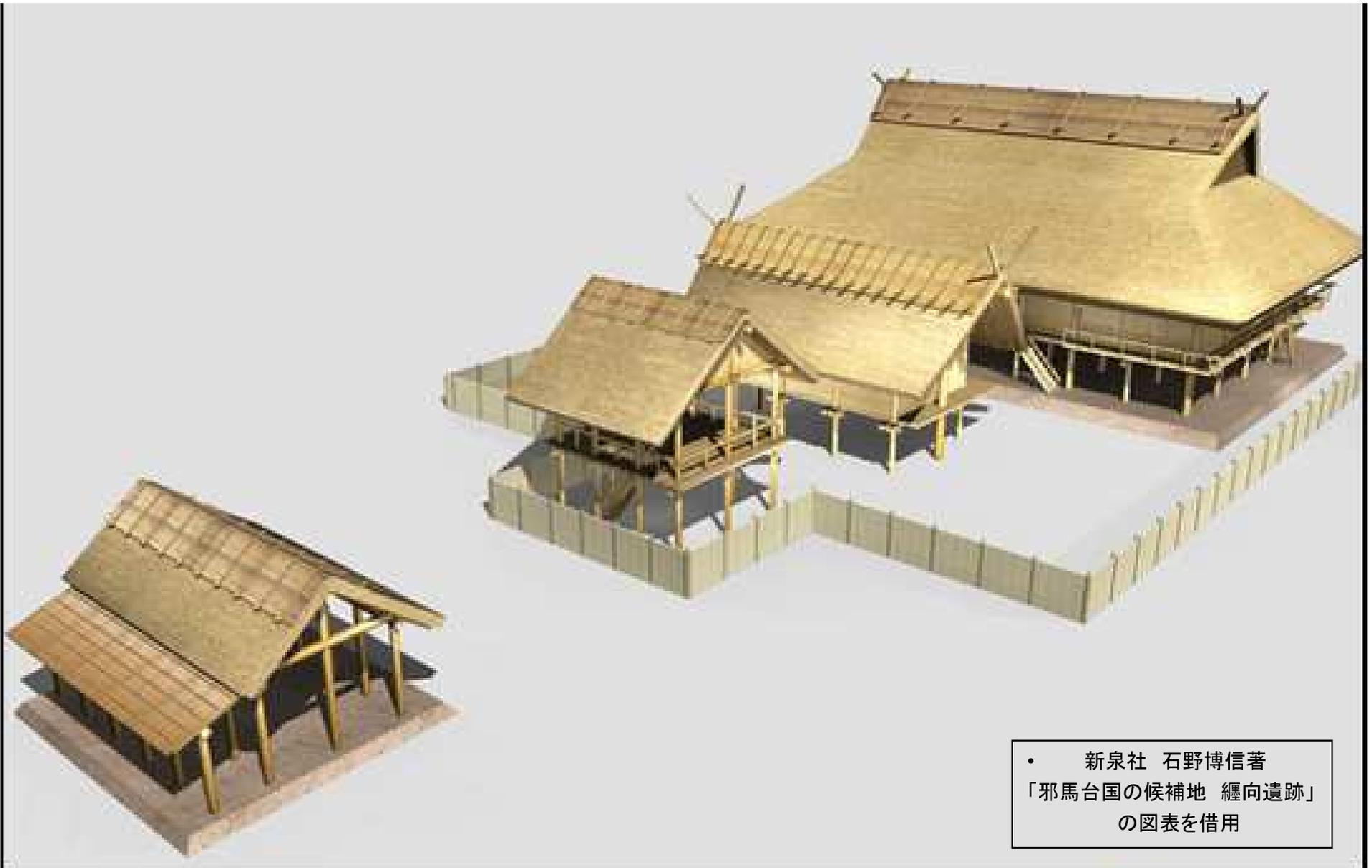
緑色の木々に覆われた優しく美しいものが古墳とされている方が多いと思います。この迫力は、別ものです。

築造当時の前方後円墳はこの写真のように、全体が葺き石で覆われ、埴輪が立ち並ぶ、迫力のあるものだった。

この古墳は山の上に造られたものだが、纏向の箸墓古墳(全長278m高さ30m)は、平地に築造され、凡そ、サイズで2.9倍、面積で8.4倍、体積で24.3倍の巨大なもの。

近代ビル群を見慣れた現代人とはちがい、大きな建造物を見慣れない古代人にとって、初めて見た巨大古墳のその迫力は、ものすごかったと想像される。

纏向の遺跡 柱穴列の跡から復元した建物群



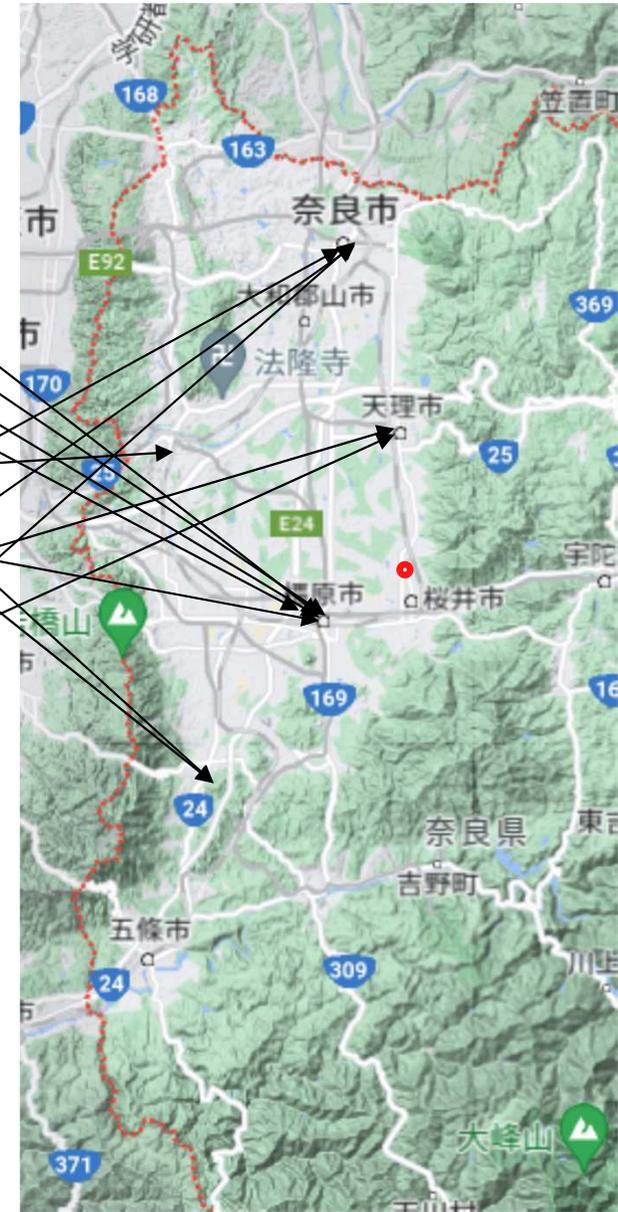
- 新泉社 石野博信著
「邪馬台国の候補地 纏向遺跡」
の図表を借用

考古学者の位置付け

- 「最初の巨大古墳・箸墓古墳」 清水眞一著 (株)新泉社 より 抜粋
 - 三世紀後半期に確立した大和政権の初代大王の墓であろうと考えている。
 - それでは、初代大王であれば神武天皇なのか、それとも実質の初代といわれている崇神天皇なのか、その辺のところは断定できる論拠を持たない。
 - 神武天皇は、あくまでも神話の世界の人物と考えており、崇神天皇の陵は「古事記」に「山の辺道の、勾のおかの上にある陵」とあるところから、山の辺道(私の言う山の辺古道、85頁参照)のさらに上(東側)に位置する古墳を想定したい。
 - 大和古墳群のなかで、200メートル以上の大王墓と見られるものは、箸墓・西殿塚・行灯山・渋谷向山古墳となり、箸墓古墳は、崇神・景行天皇以前の大和の大王墓かと考える。
 - もちろん崇神天皇以前の開花・孝元天皇などが「記紀」には記されているが、わたくしは神武天皇と同じ存在とみており、ここでは除去して考えたい。
 - そうしてみると、匹敵する大王は存在しないことになる。であれば三世紀半ばで死んだ女王卑弥呼でいいのではないかとの意見もあるが、わたくしは卑弥呼説をとらない。「記紀」に書かれる以前の、大和平野を支配した王たちのなかの優れた王であったと考える。

大和朝廷初期の天皇の墓は推定されている

天皇名	陵名	所在地	
1	神武天皇	畝傍山東北陵	奈良県橿原市大久保町
2	綏靖天皇	桃花鳥田丘上陵	奈良県橿原市四条町
3	安寧天皇	畝傍山西南御陰井上陵	奈良県橿原市吉田町
4	懿徳天皇	畝傍山南織沙溪上陵	奈良県橿原市西池尻町
5	孝昭天皇	掖上博多山上陵	奈良県御所市大字三室
6	孝安天皇	玉手丘上陵	奈良県御所市大字玉手
7	孝靈天皇	片丘馬坂陵	奈良県北葛城郡王寺町本町3丁目
8	孝元天皇	劔池嶋上陵	奈良県橿原市石川町
9	開化天皇	春日率川坂上陵	奈良県奈良市油阪町
10	崇神天皇	山邊道勾岡上陵	奈良県天理市柳本町
11	垂仁天皇	菅原伏見東陵	奈良県奈良市尼辻西町
12	景行天皇	山邊道上陵	奈良県天理市渋谷町
13	成務天皇	狹城盾列池後陵	奈良県奈良市山陵町
14	仲哀天皇	惠我長野西陵	大阪府藤井寺市藤井寺4丁目
15	應神天皇	惠我藻伏崗陵	大阪府羽曳野市誉田6丁目
16	仁徳天皇	百舌鳥耳原中陵	大阪府堺市堺区大仙町



- 初期の歴代天皇陵は、議論が有っても推定されている。

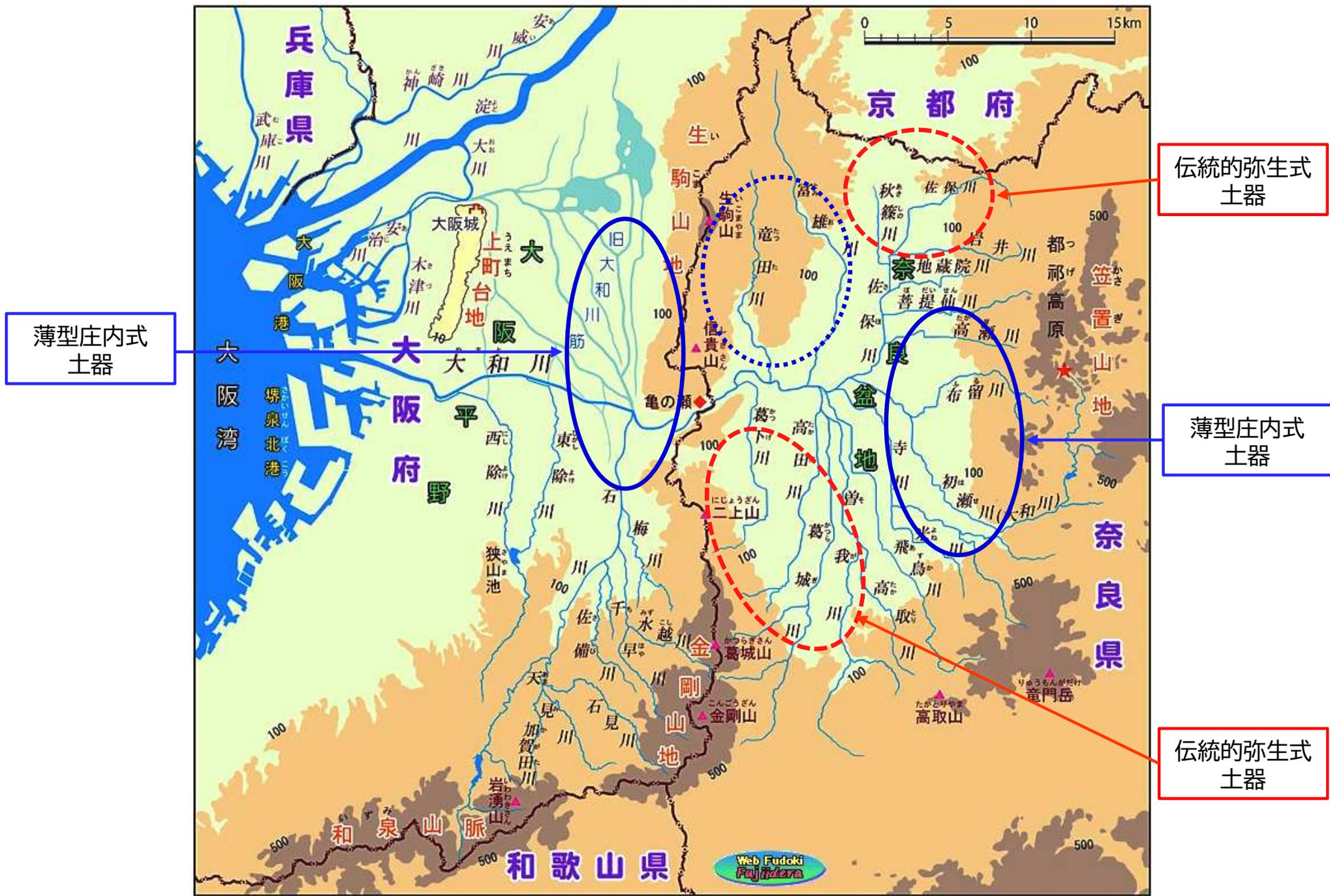
考古学者の位置付け その2

- 「邪馬台国の候補地 纏向遺跡」石野博信著 新泉社 より
 - 箸中山古墳は、三世紀末の全長280メートルの大王墓である。その築造年代は、(中略)三世紀後半、より厳密には第4四半期、暦年代は280～290年と考えている。
- 突然現れ突然消えた纏向 P158 石野博信
 - 纏向遺跡は、きわめて異質な集落遺跡。
 - 二世紀末に突然現れて、四世紀中ごろに突然消える。
 - それ以前の纏向地域はいわば過疎地帯です。
 - 唐古をはじめ奈良盆地の中央部に中心的な集落が5～6ヶ所あり、小さな集落は50ヶ所ほどあります。
 - 日常使われた器類は、薄手の土器で、熱効率がいい、庄内式土器です。
 - ただし50パーセントは伝統的な厚甕(あつがめ)も使っています。
 - 薄甕を使うのは奈良盆地の東南部、桜井市から天理市にかけての地域が中心
 - 三、四世紀の大形古墳群の分布と一致しています。
 - 現在の奈良市とか葛城地域などでは伝統的弥生式土器をずっと使い続けています。
 - ある日突然現れて、ある日突然消える。周囲の集落とは違う土器を特に使う、そのうえ吉備の特殊器台を取り入れて墓に使う、一直線に大形建物を並べる、これが纏向の特殊性です。

大和周辺の集団と土器

大和川水系の流域地図

※ロールオーバーになっています



築造工事に携わった人々の出身地域は、土器から判る

- 最初の前方後円墳の構築に携わった人達
 - 古墳の工事に携わった人達の住んで居た地域が発掘、その土器に地方色があり判明。
 - その地域で作られた土器が約50%、
 - 外の地域で製作され持ち込まれたものが50%、
 - 東海地方が半分、その外は、河内、近江、北陸、山陰、吉備、阿波



大和の初代大王の墓の築造に馳せ参じた人達の地域は、その初代大王を支えた地域

図 19 ● 纏向遺跡出土の全国各地からの搬入土器

箸墓古墳北側の、第81次調査時発見の周濠内にも、このような各地から持ち運ばれた土器の破片が数多く出土している。その数は、古墳築造時に動員された地方の人びとの数を、ある程度反映したものだだろう。

纏向で発掘される土器の出身地は？

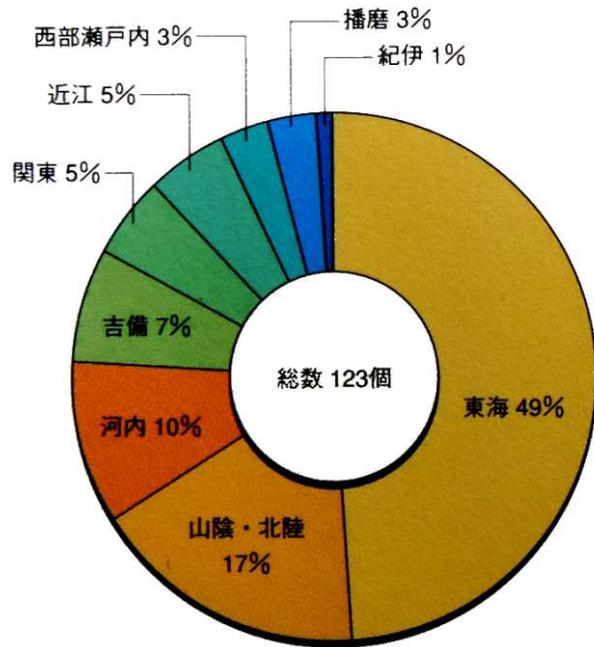
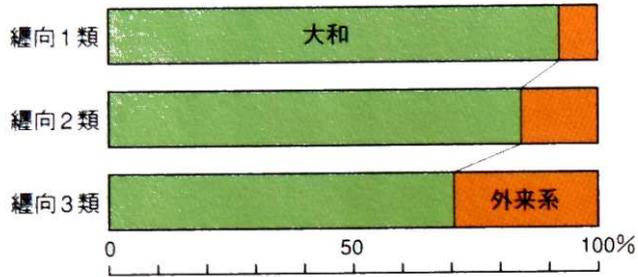


図 13 ● 纏向の外来系土器の比率
比率は調査地点によって異なるが、祭祀関連の遺構では、外来系土器の比率が高い。

「邪馬台国の候補地 纏向」より



図 15 ● 厚甕は東へ、薄甕は西へ
3世紀の近畿には、伝統派・厚甕と革新派・薄甕が共存しているが、厚甕が多い。そして、その分布は東西に分かれる。

箸墓古墳と纏向型古墳などから判明したこと

- 纏向は、
 - 弥生時代には、大きな集落や墳丘墓もない、未発展の地域だった。
 - 弥生末期に突如、計画的な集落・建物が作られ、巨大な古墳・箸墓古墳が築造された。
 - その結果、日本各地に、古墳築造ブームが起きた。
- 纏向に関わる現象を、地域別に、その成立前からその直後の状況を表に整理する。

	東遷時期	前方後円墳の先行基盤				大和の甕 の形式の 出身地	箸墓古墳築造	初期古墳ブーム期		
	高地性 集落	古墳形状	埴輪	葺石 貼石	副葬品		築造参加 (土器)	前方 後円墳	前方 後方墳	四隅突出 古墳
北九州					○	○		○	□	
安芸	X									
吉備		○	○	△		○	○	○	□	
出雲	X			○		○	○			□
北陸	X					◎	○	○	□	□
滋賀						◎	○		□	
伊勢	X					◎	○	○	□	
濃尾平野	X					◎	○		□	
関東						◎	○	○	□	
会津								○	□	□

X は有ること=敵対関係を示す

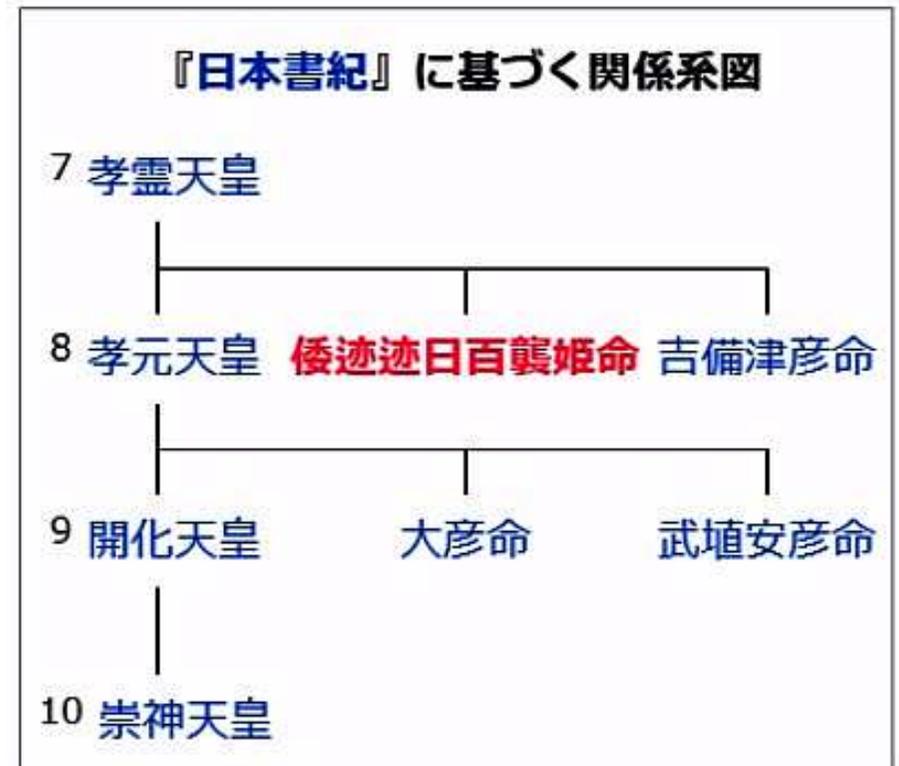
○は薄い甕 ◎は厚甕

誰が葬られたのか？ 検討材料

- 考慮すべき点
 - 纏向遺跡は二世紀末に突然現れて、四世紀中ごろに突然消える。
 - それ以前の纏向地域はいわば過疎地帯です。
 - 日常使われた器類は、薄手の土器で、熱効率がいい、庄内式土器です。
 - 箸墓築造時期は、庄内式の次の布留式0期(始りの時期)とも云われる
 - 築造工事に携わった人々の出身地域は、東海地方が半分、外は、河内、近江、北陸、山陰、吉備、阿波
 - 三世紀後半期に確立した大和政権の初代大王の墓であろうと考えている。(清水眞一氏)
 - 崇神・景行天皇以前の大和の大王墓かと考えるが、
 - 匹敵する大王は存在しないことになる。
 - 箸中山古墳は、三世紀末の全長280メートルの大王墓である。(石野博信氏)
 - その築造年代は、(中略)三世紀後半、より厳密には第4四半期、暦年代は280～290年と考えている。
 - 纏向遺跡・箸墓古墳は、三輪山を仰ぐ場所にある。
- 考古学者の意見は、十分信頼性があり尊重すべきと思われる。
 - しかし、突破口が無いと、答えが出ないことは明白。
 - 突破口は何か？

古事記と日本書紀の記述

- 箸墓の築造の記述が、日本書紀の崇神紀にある。
 - 倭迹迹日百襲姫命(ヤマトトビ モモソ ヒメノミコト)が死に、大市に葬った。
 - 名づけて、箸墓と云う。
 - その墓は昼は人が造り、夜は神が造った。大坂山の石を運んで造った。
 - 山から墓に至るまで、人民が連なって手渡しにして運んだ。
 - 第7代孝霊天皇皇女:倭迹迹日百襲姫命が箸墓に祭られた人である。
 - 年代は、第7代孝霊天皇/第8代孝元天皇の時代となる
 - しかし、百襲姫は大物主神の妻となったとの記述が有り、妻と夫の生存した時代が全く合わない。
 - 話自体に年代的に矛盾があることは、誰が見ても、書紀成立時の人が読んでも、一目瞭然のこと。
 - そのまま、認めることは、難しい。
- 「古事記・日本書紀の成り立ちとその違い」を可児さんに纏めてもらい、「一書と 天孫族・出雲族の系図」を話した。
- この時に理解したことの一つに、古事記に記載と同一のテーマを日本書紀で取り扱っており、先に完成した古事記と比較された筈で、そこで発生した問題を解消するためか、一書が記載され、古事記との違いが埋めている。
- 同じテーマを古事記/日本書紀で比較することが、問題解決する糸口になるかも知れない。比較してみる。



- 古事記

- 神武天皇の皇后選定
 - 三輪山の大神主神と後に妻となる勢夜陀多良比売の卑猥な出会いの話。
 - 矢はたちまち美しい壮夫の姿に戻り、大神主神はその乙女を娶り結婚されました。
 - 生まれた子の伊須気余理比売は、「神の子」と呼ばれる。
 - 伊須気余理比売は神武天皇の正妃となった。
- 崇神天皇 神々の祭祀
 - 疫病が流行り、人民死ぬ。
 - 大神主神が夢に現れ、意富多々泥古に祀らせるよう言う。
 - 意富多々泥古は、大神主神と活玉依毘売の子：櫛御方、そのこ：飯肩巢見、その子：建甕槌命の子
 - 意富多々泥古に祭らせると、疫病は止み、平穩に。
- 崇神天皇 大三輪神
 - 美しい少女：活玉依毘売は身ごもった。夫の素性を知るために、糸巻の糸を男の着物に刺した。翌朝、男の行方を捜すと、三輪山の社に留まった。
 - 男は三輪山の大神主神と判った。
 - 糸巻に三勾残ったので、その地を美和と云う。

- 日本書紀

- 神代上 大三輪神
 - 大己貴神/大国主命は少彦名命を失い落胆。
 - 幸いをもたらす人物が現れた。それが大三輪の神。
 - この神の子は、賀茂君たち、大三輪君たち、また姫踏鞮五十鈴姫命。
 - 又、事代主と三島の溝檜姫/玉櫛姫の子が、姫踏鞮五十鈴姫命で、神武天皇の後。
- 崇神紀 5・6・7・8年
 - 国内に疫疫多く、民死亡。百姓流浪。
 - 倭迹迹日百襲姫命は、神憑りして、言う「大神主神を祀れ。吾が児の太田田根子をもって祀らせろ。」
 - 太田田根子に祀らせると疫病が止み、百姓饒ひぬ。
- 崇神紀 箸墓の築造
 - この後、倭迹迹日百襲姫命は、大神主神の妻となった。神は昼は来ないで夜だけきた。
 - 姿を見たいと願いを言い、翌朝、櫛函を見ると、誠に美しい小蛇が入っていたのを見て、驚き叫んだ。
 - 蛇は人の形になり「恥をかかせた。」と云い、三輪山に登った。
 - 倭迹迹日姫命は仰ぎみて悔いどすんと坐りこんだ。そのとき、箸で陰部を突いて死んだ。
 - 大市に葬った。名づけて、箸墓と云う。
 - その墓は昼は人が造り、夜は神が造った。大坂山の石を運んで造った。山から墓に至るまで、人民が連なって手渡しにして運んだ。

【古事記】中つ巻 神武天皇の皇后選定

- 伊須気余理比売
- しかし、更に美人を求め正妃にしようとしておられました。ある時、大久米命おおくめのみことが申し上げました。
- 「この間、乙女がおりました。それが神の御子と言っております。神の御子だと言う理由はこうです。
- 『三嶋湟咋の娘がおりまして、名を勢夜陀多良比売(せやだたらひめ)と言います。それは容姿端麗でございましたので三輪の大物主の神が見てびびっと感じました。ですのでその美人が大便をしていた時に、丹塗矢にぬりやに化けその大便をする溝を流れ下り、その美人の富登(陰部)を突きました。するとその美人は、驚き走り回りあたふたしました。
- そしてやって来た矢は、床の辺りに置かれました。するとたちまち麗しく立派な男と化したのです。そしてその美人を娶めとり生まれた子が、名を富登多多良伊須須岐比売命(ほとたたらいすすきひめのみこと)と申し、またの名を比売多多良伊須気余理比売(ひめたたらいすけよりひめ)と申すのです。』
- 【これはその名の「ほと」という部分が悪いので、後に名を改めたのでございます。】
- そうした事により、神の御子みこだと申しておりました。」
- それから後、七人の乙女が高佐士野で遊んでおりまして、伊須気余理比売がその中にありました。(中略)
- このようにして、その令嬢は「お仕え致しますわ。」と申し上げました。
- さて、伊須気余理比売命いすけよりひめのみことの家は、狭井川の川上にありました。天皇は、その伊須気余理比売いすけよりひめのところにおいでなされて、一夜床を同じくしました。
- 【その川を「さい川」というわけは、その河辺に山百合草やまゆりそうが群生していましたので、その山百合草の名を取り「さい川」と名付けられました。山百合草の元の名は「さい」と言います。】

<https://kaze-yashiro.com/kojiki-book-second-text-one/4/>

【古事記】(原文・読み下し文・現代語訳)中巻・その壱 より借用

- 古事記

- 神武天皇の皇后選定
 - 三輪山の**大物主神**と後に妻となる**勢夜陀多良比売**の卑猥な出会いの話。
 - 矢はたちまち麗しい壮夫の姿に戻り、大物主神はその乙女を娶り結婚されました。
 - 生まれた子の**伊須気余理比売**は、「**神の子**」と呼ばれる。
 - 伊須気余理比売**は神武天皇の**正妃**となった。
- 崇神天皇 神々の祭祀
 - 疫病が流行り、人民死ぬ。
 - 大物主神**が夢に現れ、**意富多々泥古**に祀らせるよう言う。
 - 意富多々泥古**は「**神の子**」。大物主神と**活玉依毘売**の子:櫛御方、そのこ:飯肩巢見、その子:建甕槌命の子
 - 意富多々泥古**に祭らせると、疫病は止み、平穩に。
- 崇神天皇 大三輪神
 - 美しい少女:**活玉依毘売**は身ごもった。夫の素性を知るために、糸巻の糸を男の着物に刺した。翌朝、**戸の鍵穴から抜け通って**出た糸を追って男の行方を捜すと、**三輪山の社**に留まった。
 - 男は**三輪山の**大物主神****と判った。
 - 糸巻に三勾残ったので、その地を**美和**と云う。

- 日本書紀

- 神代上 大三輪神
 - 大己貴神/大国主命は少彦名命を失い落胆。
 - 幸いをもたらす人物が現れた。それが**大三輪の神**。
 - この**神の子**は、賀茂君たち、大三輪君たち、また**姫踏鞮五十鈴姫命**。
 - 又、**事代主**と三島の**溝檜姫/玉櫛姫**の子が、**姫踏鞮五十鈴姫命**で、**神武天皇**の後。
 - 崇神紀 5・6・7・8年
 - 国内に疫病多く、民死亡。百姓流浪。
 - 倭迹迹日百襲姫命**は、神憑りして、言う「**大物主神を祀れ。吾が児の太田田根子をもって祀らせろ。**」
 - 太田田根子に祀らせると疫病が止み、百姓饒ひぬ。
 - 崇神紀 箸墓の築造
 - この後、**倭迹迹日百襲姫命**は、**大物主神の妻**となった。神は昼は来ないで夜だけきた。
 - 姿を見たいと願いを言い、翌朝、櫛函を見ると、**誠に麗しい小蛇**が入っていたのを見て、驚き叫んだ。
 - 蛇は人の形になり「恥をかかせた。」と云い、三輪山に登った。
 - 倭迹迹日姫命**は仰ぎみて悔いどすんと坐りこんだ。そのとき、**箸で陰部を突いて死んだ**。
- 大市に葬った。名づけて、箸墓と云う。
 - その墓は昼は人が造り、夜は神が造った。大坂山の石を運んで造った。山から墓に至るまで、人民が連なって手渡しにして運んだ。

同じ処と違う処・追加された処

「3か所に書かれた内容を比較する。」

- 大部分は同一の内容：
 - 大物主の娘が神武天皇の正妃となったこと。（大物主＝事代主と書紀は明記）
 - 崇神帝の時に、疫病がはやり困った時に、大物主を祀れば納まると云われ、大物主の子孫の太田田根子に祀らせた処、収まった。
 - 大物主が、姿を変え妻の処に通った。
- 異なった部分：
 - 大物主が、姿を変え妻の処に通った処では、
 - 古事記は、不思議なお伽噺風に記し、三輪山の言葉の由来を説いた。
 - 夫：大物主神と妻：活玉依毘売 は同時代の人。系図が示されている。
 - 書紀では、蛇に姿を変えたとし、驚いた姫が、驚いて、箸で陰部を突いて死んだとエロチックな話を挿入して、人の気を引く話とした。
 - 但し、エロチックな話は、古事記の神武の妻の母と大物主のことでも、挿入されている。
 - 夫：大物主神と妻：倭迹迹日百襲姫命 は別の時代の人
- 古事記には無い話が日本書紀に、付け加わったこと。
 - 箸で陰部を突いて死んだ倭迹迹日百襲姫命の墓のこと。
 - 墓の名を箸墓とした。
 - 人民が連なって、墓の築造に参加し、「昼は人が造り、夜は神が造った。」と称賛した。

追加された話

古事記と同じ話を書紀で書きながら、敢えて、箸墓築造の話を入れたのか。

- 箸で陰部を突いて死んだ倭迹迹日百襲姫命の話は、美しくも、悲しくも、楽しくもない。年代も合わない。
 - その姫のために、人民総出で墓の築造を行うとは、誰も考えない。
 - 書き手も、読み手も、妻と夫の時代が明らかに違う話を、素直に受け取ることは無い。
- 書紀が違いの有る文章を入れたのは、別の意図があった考える。
- 妻の倭迹迹日百襲姫命の為に、人民総出で作ったのではなく、夫の大物主の為に、人民総出で、人と神が昼夜を問わず、石を運び、築造したことを、書紀の中に、潜り込ませたのではないかと推測。
 - 古事記/日本書紀での「大物主＝事代主」記述の仕方

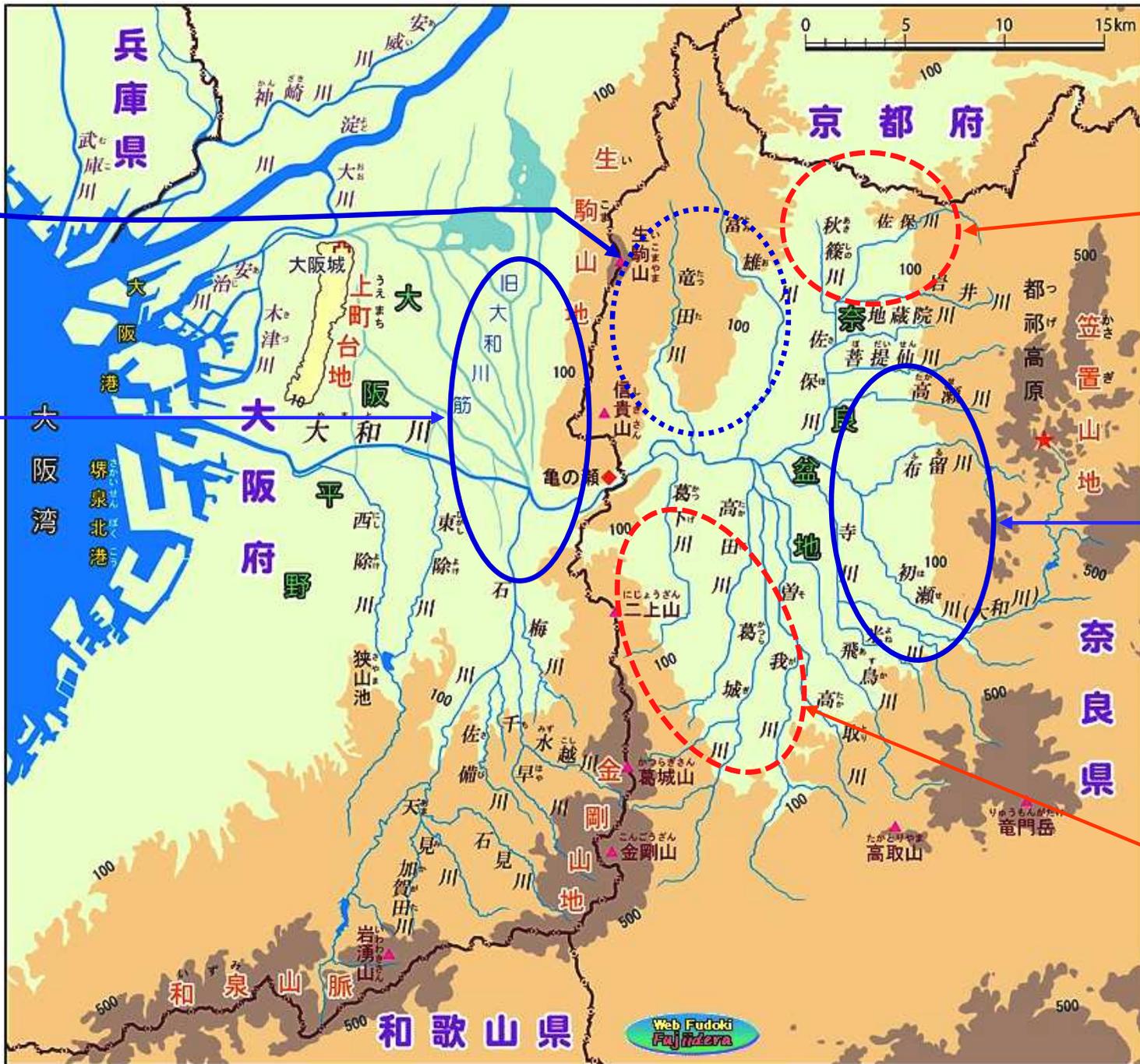
	「古事記」	「日本書紀」
• 神武の正妃の親	大物主とだけ記す。	• 事代主と明記
• 綏靖天皇の正妃の親	師木縣主	• 事代主と明記
• 安寧天皇の正妃の親	師木縣主の子	• 事代主の子：鴨王と明記

 - 古事記では、事代主の名前は隠されている。
 - その後、記載は無く、崇神帝の時の記述となる。
 - 古事記では、大物主の名前と三輪山の名の由来が出るが、事代主・箸墓は出てこない。
 - 古事記では、何故か事代主を記載することが憚られている。
- 日本書紀を記述/編集する時に、憚られていた事代主の記述に対して、不満の有る事代主/出雲由来の豪族達が、箸墓とその築造の話を、正史である日本書紀に、入れたがったものと想像する。
 - 崇神帝の時に、疫病の流行を、ないがしろにされていた大物主神を祀ることで解消したとの記述が取り上げられたことから、箸墓とその築造の話を入れ込むチャンスと考えたのでは？
 - 憚る気分又は、記載に反対する人達もあったため、倭迹迹日百襲姫命と大物主の話として、時代が合わない荒唐無稽な話として、入れ込んだものとする。
- 敢えて、箸墓を入れた理由は、人民総出で昼は人が夜は神が築造したこと。そして、その墓は、時代の合わない妻では無く夫の大物主/事代主だったと推測するような形で、入れたものとする。

大和周辺の集団と土器

大和川水系の流域地図

※ロールオーバーになっています



長脛彦の勢力範囲

薄型庄内式土器

饒速日・物部一族の勢力範囲

伝統的弥生式土器

薄型庄内式土器

大物主・事代主の勢力範囲

伝統的弥生式土器

初期天皇一族の勢力範囲
陵墓も存在

纏向の地/箸墓の主

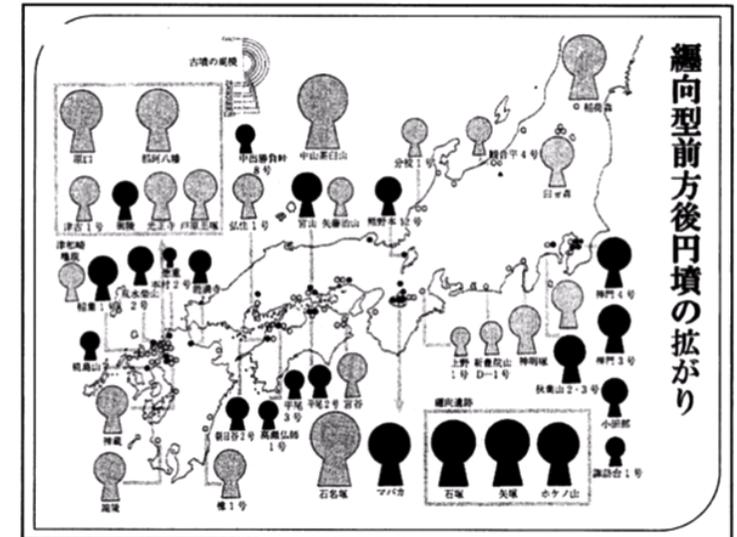
- 纏向の地とその一帯は：
 - 三輪山の麓にある。
 - 神武の正妃：伊須気余理比売の家は佐韋河の上とある。(大神神社の北200mほど)
 - 磯城郡(しき)(現在の磯城郡と桜井市、天理市の一部)(志貴・志紀・師木・志癸とも表記する。)
 - 綏靖・安寧両天皇の妃も師木縣(磯城郡)
 - 庄内式土器が使用され、初期の布留式土器が出土。
 - 大型建物を含む纏向遺跡がある。
 - 纏向遺跡出土の土器の製作地域：東海地方・河内・近江・北陸・山陰・吉備・阿波は、出雲族の支配地だった処。
- 大和周辺の集団は：
 - 神武東征前には、饒速日命/物部一族、長脛彦が奈良の西側に居住し、東側の磯城郡を中心に事代主＝大物主が、居住していた。神武天皇一族は、奈良盆地の南側に居住した。
 - 前頁の図のように理解すると、纏向/箸墓一帯は、大物主＝事代主の勢力範囲になる。
- 箸墓は、大物主＝事代主の墓とすると、
 - 考古学者の説及び古事記・日本書紀の記述に合致する。
 - 考古学者は、箸墓の主を、大和朝廷初期の大王の墓＝天皇の墓と考えていたが、大和朝廷成立時に、実質的に絶大な力を持っていた大物主：事代主の墓とすると、考古学上の成果と相反することは無い。
 - 大物主＝事代主は、実質上天皇一族と互する力を有していた。
 - 事代主の娘・孫娘が、3代天皇の正妃となった事実からも、その力が判る。
 - 実質的に力を持っていた即ち大王に匹敵する権力を有していた事代主：大物主

追記:日本書紀(天武紀)も傍証に

- 「壬申の乱」 箸墓での戦闘
 - 将軍(大海人皇子側)が本営の飛鳥に帰ると、東国からの本隊の軍が続々やってきた。そこで軍を分けて、それぞれ上道、中道、下道にあてて配置した。将軍吹負は自ら中道にあたった。
 - 折しも近江の将、犬養連五十(大友皇子側)は、中道からきて村屋に駐屯し、別將の廬井造鯨に、二百の精兵を率いさせ、将軍吹負の陣営を襲わせた。たまたま陣には兵が少なく、防ぐことができなかった。
 - 近くの大井寺の奴の徳麻呂ら五人が従軍しており、徳麻呂らは先鋒となって進んで射かけたので、鯨の軍は進むことができなかった。
 - この日、三輪君高市麻呂、置始連菟は上道の守りに当たっていて、**箸陵のほとり**で戦った。大いに近江軍を破り、勝ちに乗じて鯨の軍の後続を断った。
 - 鯨軍不能進。是日、三輪君高市麻呂・置始連菟、當上道、戰于箸陵、大破近江軍。而乘勝、兼斷鯨軍之後。
- 「壬申の乱」 高市の県主許梅(こめ)が神懸かり
 - 高市の県主許梅(こめ)が神懸かりして、「吾は、高市の社に居る、名は事代主神。また「身狭の社」に居る、名は生靈神である」、大海人皇子軍が**神武陵**に軍馬・武器を奉納したという記事がある。
 - 先是、軍金網井之時、高市郡大領高市縣主許梅、儻忽口閉而不能言也。三日之後、方着神以言「吾者高市社所居、名事代主神。又身狭社所居、名生靈神者也。」乃顯之曰「於神日本磐余彥天皇之陵、奉馬及種々兵器。」便亦言「吾者立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉。今且立官軍中而守護之。」且言「自西道軍衆將至之、宜慎也。」言訖則醒矣。故、是以、便遣許梅而祭拜御陵、因以奉馬及兵器、
- 壬申の乱(672年)の時には、「神武天皇陵」が存在し、別に、箸墓も存在した。
 - 従って、箸墓は神武天皇陵ではない。

古墳の形・弥生墳墓

- 大型古墳を象徴する箸墓古墳建造以降を古墳時代と定義するとの説がある。
 - その説に従うと、箸墓古墳の周辺にある纏向型古墳(帆立貝型古墳)は、弥生墳墓と云える。
- 弥生墳墓としては、
 1. 方形周溝墓
 2. 四隅突出型墳墓 :
 - 弥生時代に出雲から日本海沿岸に見られる墳墓
 3. 突出部付き円丘墓・盾築墳丘墓
 - 瀬戸内海の吉備の墳丘墓、
 - 葬礼の人の上り下りが可能な突出部を伴った円墳
 4. 纏向型古墳
 - 巻向地域/千葉・市原等
 - 方形周溝墓を除き、四隅突出型墳墓・盾築型墳丘墓・纏向型古墳は、いずれも、出雲族の勢力範囲で、広がっていた墳墓形式。

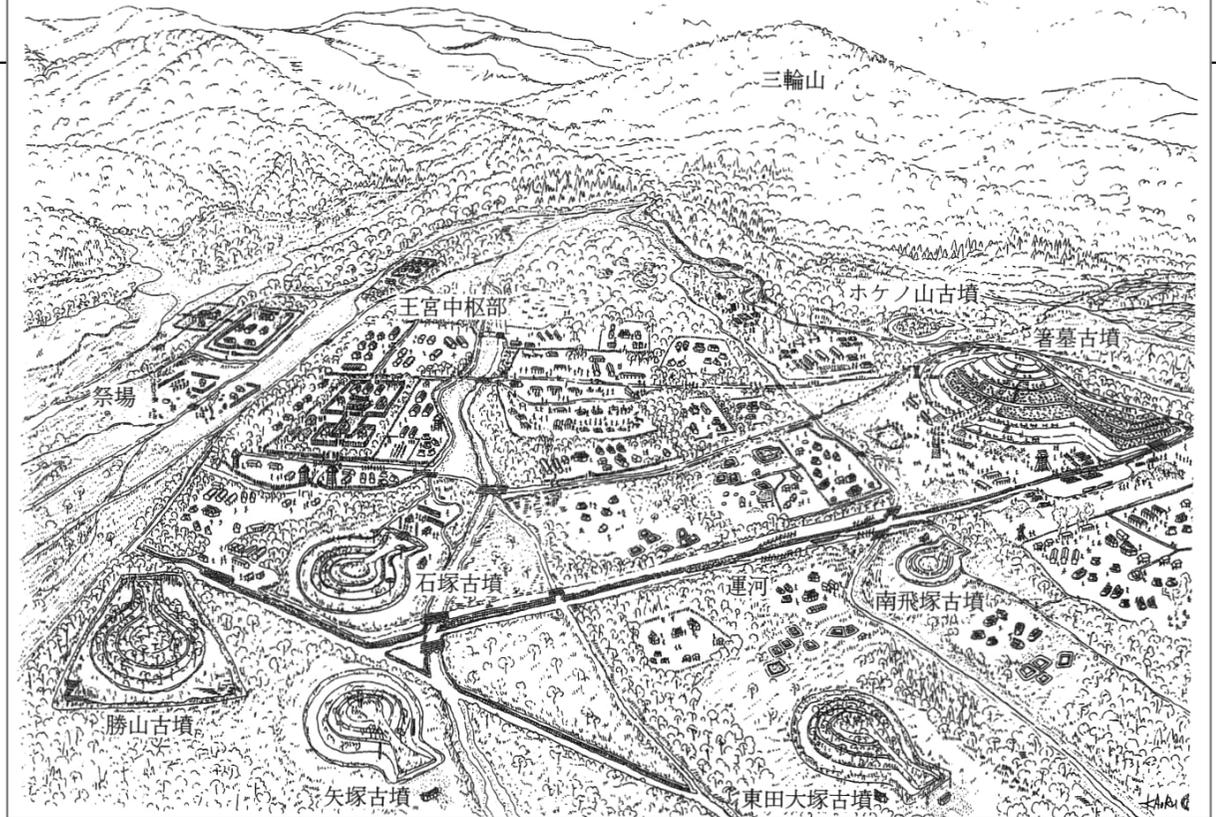


邪馬台国の会活動記録第21回寺沢薫氏・纏向学への招待

巻向遺跡

- 右の図は、纏向学研究センターの寺沢薫氏の描いた纏向。纏向の特徴をよく表している。
- 石野博信氏によれば、
- 巻向遺跡は、二世紀末に突然現れて、四世紀中ごろに突然消える。「突然現れ突然消えた纏向」

【纏向遺跡の全貌】（寺沢薫画）



- 古事記に記された逸話
 - その神の嫡后須勢理毘売命、甚く嫉妬したまいき。故、その夫の神わびて、出雲より倭国（やまと）へ上りまさむとして、装束し立たす時に、片御手は御馬の鞍にかけ、片御足はその鐙に踏み入れて、歌ひたまいく、
 - ---歌のやり取りが有り、---
 - 結局、大国主命は出雲に残った。
 - この時の描写から見ると、大国主は本拠地を出雲から大和に移すことになっていた。
 - この時に、大和に作られたのが、纏向の地：整然と区画整理された都市では無いかと見る。
 - 出雲一族の新しい首都であったと見る。